

令和4年度日本博主催・共催型プロジェクト

上賀茂神社笠懸神事

令和4年10月16日(日)

賀茂別雷神社(上賀茂神社)
(京都市北区上賀茂本山339番地)

主催 公益社団法人大日本弓馬会、独立行政法人日本芸術文化振興会、文化庁

【笠懸とは】

騎射の1つであり、右下方、左下方の的を射るなど実戦的で高い技量を要します。



【上賀茂神社の笠懸】

約800年前に後鳥羽上皇が同地で「笠懸」を行った故事にちなみ、平成17(2005)年に約800年ぶりに復興され現在に至ります。日本で唯一、笠懸を神事として奉納している貴重な伝統文化です。



【上賀茂神社と馬の神事】

「賀茂競馬(かもくらべうま)」は、堀河天皇寛治7年から始まり来年で930年を迎えます。日本競馬が万延元(1860)年から、イギリスのロイヤルアスコット競馬が1711年から開始されていることなどから、世界最古の「競馬」は、ここ上賀茂神社の「賀茂競馬」と云われています。



【実施内容】

- 09:30 笠懸講座・馬場見学会
- 13:00 笠懸神事 ※Youtubeでライブ配信
- 15:30 射手との交流会



JAPAN CULTURAL EXPO

心を、うごかさう。

Art Moves Us All.



【日本博とは】

「日本博」は、総合テーマ「日本人と自然」の下に、文化芸術の各分野にわたり、縄文時代から現代まで続く「日本の美」を国内外へ発信し、次世代に伝えることで更なる未来を創生することを目的としています。東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機に、各種事業を全国で展開しており、大日本弓馬会も令和2年度から3年連続で採択されています。

公益社団法人大日本弓馬会

神奈川県鎌倉市御成町20-43

post-kyuubakai@yabusame.or.jp

HP



Youtube



公益社団法人 大日本弓馬会
The Japan Equestrian Archery Association

上賀茂神社笠懸神事のみどころ

馬を走らせ、馬上から矢を射ることを騎射（きしゃ）といいます。騎射は、戦における実践的な技術であったばかりでなく、最高の武芸であるとされ、鎌倉武士たちは弓馬の腕前を競い合い、己の誇りとしていました。

騎射のうち「流鏑馬（やぶさめ）」「笠懸（かさがけ）」「犬追物（いぬおうもの）」を特に「騎射三物（きしゃみつもの）」といいます。「流鏑馬」が一方向に馬を走らせ、左横に置かれた3つの的を射るのに対し、「笠懸」は馬場を往復しながら的を射る点異なります。

往路の「遠笠懸」では、的は両端を竹矢来で囲まれており、的を狙う機会は人馬と的が直角に位置する一瞬しかありません。

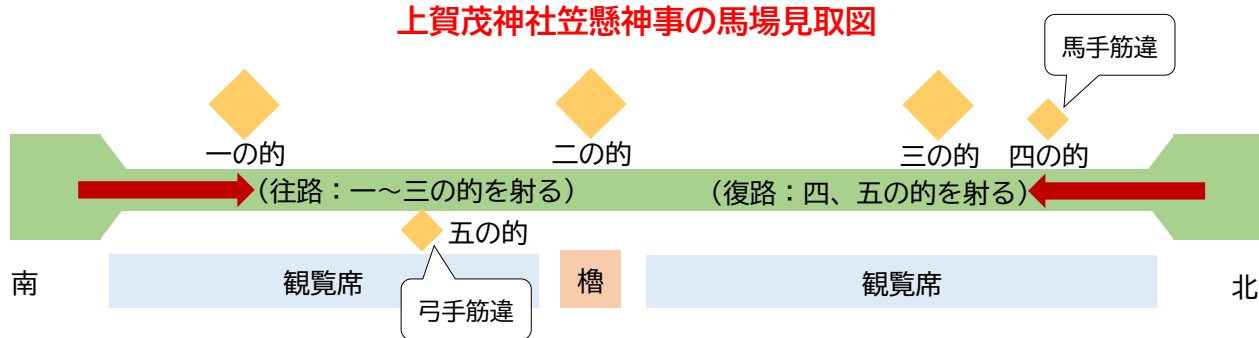
また、復路の小笠懸は、馬の左右足元の近くに置かれた小ぶりの的を射るという大変高度な技術が要求されます。

左下方を射る射法を「弓手筋違（ゆんですがい）」、右下方を射る射法を「馬手筋違（めてすがい）」といいます。射手（いて）は弓を左手に持つため、特に「馬手筋違」では、体をひねり、馬の首を越えて右側で弓を構えます。大変難しい技であり、的中させるのは至難の業です。ご観覧の折には、是非とも、弓馬練達の射手たちによる高度な射法にご注目ください。



馬手筋違の射法

上賀茂神社笠懸神事の馬場見取図



笠懸の起源

笠懸の起源は定かではありませんが、神武天皇東征の折、筑紫箱崎の浦（現在の福岡市）で騎射の稽古をしたとき、被っていた笠に皮を張って的にしたのが「笠懸」の起こりともいわれています。日本書紀には、雄略天皇（456年即位）の時代に「笠懸」が記されています。

「笠懸」は平安期から鎌倉期に盛んに行われ、吾妻鏡には源頼朝、頼家が御家人たちと「笠懸」に興じたことが記されています。当時の騎馬武者は、頑丈な大鎧に身を包み、簡単に致命傷を与えることは困難であったことから、鎧武者の急所である顔面を狙い、敵将が顔を上げたり振り返ったところを一矢で仕留める技術が重要とされました。

上賀茂神社における笠懸は、建保2年（1214）に後鳥羽上皇が行幸した際に催した「笠懸」に由来し、復興された現在では神事として奉納されていますが、元々は、こうした戦技を修練するためのものであり、平将門公、木曾義仲公、新田義貞公がいずれも顔面に矢を受け陣没しています。



弓手筋違の射法